槐（かい）

岡井省二創刊

平成26年12月号

平成二十六年十一月一日発行　第二十四巻第十一号　通巻第二八一号（毎月一回一日発行）
平成二年九月十八日第三種郵便物認可

竹の春

高橋将夫

天災と人災に耐へ豊の秋

人生の答は花野にもあらず

人の世の見せ場が並ぶ菊人形

秋気燈む日は金箔がよく延びる

PDF= 俳誌の salon

紅と金の装束龍田姫

目に見えぬ力恐ろし終戦日

ＩＴの迷路にはまる夜長かな

野に秋気剣に殺気のありにけり

煮えたぎるものに音あり秋の風

かけがひのなきこの今を踊りをり

槐二十三周年大会

大会は太き節目や竹の春

PDF= 俳誌の salon

槐安集

水野恒彦

陵につづくみささぎ秋のこゑ
秋の蟬喘き止み何か遠くなる
おのが朱を罪のごとくに雁来紅
蓑虫の糸の快楽に揺れてをり
ひととせは夢のまにまに酔芙蓉

加藤みき

水底の石乾びをり豊の秋
かまつかや五百色の色鉛筆
大鼓(おほかは)の音遠近に良夜なり
田の色の海へ傾るるところかな
長き夜や風にのりくる人のこゑ

中島陽華

南山に生れし鬼の子如意岳(にょいがだけ)
語り口俄か落しや風の秋
まつ先に顔洗ひけり秋出水
鯛の鯛三尺花火ドンパチと
けらけらと金平糖を天の河

竹内悦子

蓬生や草の紅葉となりにける
火男と阿亀の根付秋昼寝
おみくじは大吉にして毒茸
西の墓東に早稲の香りかな
にんげんの眼に満の曼珠沙華

PDF= 俳誌の salon

雨村敏子

水源は神のふところ水の秋

いなつるび産土神の集まりて

八朔の水もて洗ふ棕櫚箒

麻刈るや夕べの水の旨かりき

天の川猿のこしかけ太りをる

本多俊子

揺れながら花野は色を殖やしをり

圧し来る夢のくれない檀の実

引力のあるかなきかや鳥瓜

打ちよせる波にかすかな秋の声

未来図に銀河を渡る夢あらむ

近藤喜子

高く舞ふ秋蝶あれは伎芸天

木犀や風にまどろみ風に覚め

いつの世も人は塔組む秋の虹

うつむきし心おきくる思ひ草

宵闇や獣のやうに澄む五感

瀬川公馨

木つ端微塵に鳴神のすご業なりき

白菜の種まきせねば故宮かな

台風裏水の田畑を跨ぎけり

白隠の達磨大師のすずしさよ

ズッキーニを摘みに来たらし捨て聖

PDF= 俳誌の salon

久保東海司

壁占めて競ふ魚拓や鰤の秋

新米の手のひらにある艶光り

盆礼やタオルセットを墓守りに

滝壺に浸り眞言唱ふ人

茶柱や今日を占ひ月を待つ

柳川晋

化粧(悼)して高きに登り登りける

常連の顔して交じる踊の輪

とろろにはとろろのかたちありにける

あなまどひ二年三年同じ顔

蓑虫の滅びし町を立ち去れず

岩下芳子

重陽の朝の空の入れ替る

まんまるの摂津秋茄子おほほほほ

父の声して銀漢を仰ぎけり

ケーキ屋の裏口で焼く秋刀魚かな

象の時間鼠の時間夜長かな

近藤紀子

出揃ひし稲穂のささやき聞いてをる

銀寄とふ栗一粒をたなごころ

口かずの少なき友や青すだち

置き去りの十二センチの靴晩夏

畦道や川すぢに沿ひ蜻蛉來し

PDF= 俳誌の salon

岩月優美子

蓑虫の「御機嫌よう」と顔を出す

地を愛し風を愛して草の花

山霧に包まれ神の手を探す

秋の浜次なる波に女神生る

月光に抱かれ母性思ひをり

竹中一花

秋声の糺の森に入りにけり

京近き鬼の里山茸採る

秋灯や物書く音の走りをり

祖廟の灯消えをる山や星飛べり

産土の笛や太鼓や菊の朝

PDF= 俳誌の salon

槐市集

柴田靖子

天地の風呼びくるや柿すだれ
盛んなる時の終りを崩れ簗
秋の蝶出会ひ別れを熱きもの
秋の芽に力を受くる今日となり
秋の燈に闇遠くなる今宵かな

庄司久美子

看板の耳鼻科すぐそこ赤とんぼ
赤帽の園児の秋や河馬は留守
菊の宴そろそろ帰る時間です
秋の蚊やソバージュヘアに眼帯と
なまこかべの蔵二棟や鶏頭花

杉原ツタ子

星飛んで妣の十八番のワルツかな
秋雲を誘ふ影や能勢の山
団栗の耳飾り落ち交差点
ふるさとや名残りの月と潮の香
石畳にあと一息と草の花

鈴木初音

秋桜揺れる陽気さ秘境の邑
風の後群れて追い行く秋あかね
リハビリの小象の泳ぎ猫じやらし
豊橋動物園の小象マーラ(アジアゾウ)
素秋の山織部の魂と出合ひたる
古田織部
熊野古道まほろばとなる萩の花

PDF= 俳誌の salon

高野昌代

西行の月待つ鷺と私と
雷(いかずち)に睨み利かせし城の鯱
湧水に汗を拭うて石の上
白妙の花降るやうに鳥渡る
月明にたつた一人の兄逝かす

田中信行

カラマーゾフの兄弟の秋思かな
百日紅野の一隅を癒しをり
一日を終へたる紫煙秋の風
振り向けば落日燃ゆる芒原
眼鏡替へケンブリッジの水澄めり

谷岡尚美

新涼やショパンエチュードよどみなく
菊花展老いてますます巧みなる
空地はや葛の天下となつてをり
秋刀魚焼くはみ出してをる頭(かしら)かな
朝顔の藍を残せし終の花

寺田すず江

羞ひのそのままの色花芒
なに色の秋にしやうか惑ひあり
その奥に馬の嘶き霧流る
貝割菜遊び心のありにけり
鶏頭にぶつかつてゐる夕日かな

時澤藍

名月に浮かぶ人の名あまたなる
草の実のはじける音に力あり
黄昏へいよよ白増すそばの花
名に惚れて秋明菊を育てきし
名月を招き寄せむと消す明かり

中貞子

富士山に幾度まみゆる秋日和
秋澄むやおしやれカットの犬のゐて
高原の街はモダンに蔦紅葉
代々の農地を守り稲の花
父の気のありて重たき藁砧

PDF= 俳誌の salon

槐集

赤とんぼ幼馴染の匂ひせり　枚方　熊川　暁子

手つかずの明日まだ在るとかなかなは
からすうりの花の羽化よぶ風のあり

残る虫月を齧つてゐるらしく

手のひらに空の重さとみの虫と

大花野蝶の骸を隠しをり　大阪　有松　洋子

秋の野の夜は果てなし虫と風

秋澄むや空へゆく道知つてをり

屋上はただ佇つところ秋の風

恋知りてよりまなうらに月消えず

名月を寝て見る母に子の寝息　江島　照美

藪からし束縛といふ愛ありし

無花果の花を隠すも因果かな

他人の幸知らぬ顔して秋の風

鬼の子は変身人は脱皮する

高橋将夫選

秋の虹夢つなぎゆき朝なる　岡崎　柴田　靖子

秋の蝶明日はなきかと今を舞ふ

秋の螢闇にとかさる淡淡と

鉦叩闇こよなくよしと鳴き

蜉蝣の命も水も宇宙かな

無花果の割れてこの世の風を知る　犬塚　芳子

秋の蚊のまつわる執念たたきけり

川風に光りと翳り曼珠沙華

ちんちろりんふと我が足を引き止める

陽のあふれ風もあふれて冬隣

りんどうの野にある心活けにけり　吉田　順子

わが声のとどくところに椿の実

思ひごとふとこゑに出づ曼珠沙華

色鳥の声にぎやかに山の湖

秋草のみだれて潮目うつくしく

PDF= 俳誌の salon

銀河往来

高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

残る虫月を齧つてゐるらしく　熊川　曉子

虫の音を聞きながら、手の届くところにあるような月を見ていると、月にも蟋蟀や鈴虫がいそうな気がしてくる。「月を齧っているらしい」という大胆な発想は作者ならではのもの。〈赤とんぼ幼馴染の匂ひせり〉、〈手つかずの明日まだ在るとかなかなは〉、〈からすうりの花の羽化よぶ風のあり〉、〈手のひらに空の重さとみの虫と〉の句についても、逐一解説するまでもなく、作者ならではの視点に感心させられる。

屋上はただ佇つところ秋の風　有松　洋子

屋上ただ立つだけのところではなく、いろんな用途がある。それなのに作者は「ただ佇つところ」と断定した。例えば、入院して屋上に一人佇む日々…屋上に対して作者にはそんなような記憶が強く残っているのであろう。〈大花野蝶の骸を隠しをり〉〈秋の野の夜は果てなし虫と風〉〈秋澄むや空へ行く道知つてをり〉の句の感性も素晴らしいと思う。

名月を寝て見る母に子の寝息　江島　照美

子に添い寝しながら名月を見ている母親。子の寝息を感じながら月を見ているのであるが、実は月より子の寝顔を見ているのかもしれない。

蜉蝣の命も水も宇宙かな　柴田　靖子

水辺の蜉蝣の乱舞。命のいとなみである。宇宙の本質に迫る精神の風景。

無花果の割れてこの世の風を知る　犬塚　芳子

無花果が割れて中へ風が通った。花嚢の内側の花が人の世の風に触れた瞬間である。処女性喪失の瞬間かもしれない。

りんどうの野にある心活けにけり　吉田　順子

竜胆の花の姿を活けるのではなく、野に咲いているときの心の様を活けたのだと作者は言う。その心ばえがゆかしい。

神の水仏の水か白露の日　山根　征子

白露は新暦九月七日ごろにあたり、露が凝って白くなるの意。そんな日の水だから、普段と違う神聖なものを感じたのだ。

露座仏に座を広げたる野菊かな　永井　博光

野仏の周りに野菊が咲き揃って、まるで野仏が座る席が広がったようだという。子供の頃の田舎の風景が蘇ってくる一句。

団栗に落ち合ふ場所のありにけり　中林　晴雄

団栗がたくさん落ちて転がってゆく。土地の起伏にしたがって、集まるところにはたくさん集まっているわけだが、それを「落ち合ふ場所」と詠んだところに感心させられた。

揺籃の風のやさしさ秋桜　寺田すず江

秋桜が風に揺れているだけの景だが、「揺籃の風のやさしさ」と詠んだところに作者のやさしさがよく現われている。

（以下略）

PDF= 俳誌の salon